NEWSLETTER

「新学会設立趣意書、そして研究科の発展と本学会のこれから」

幹事長　田尻　利恵子

私たちの関西大学大学院外国語教育学研究科が、ここ千里の丘に博士課程前期課程・後期課程を併せ持つ本格的な外国語教育学研究科として、呱々のうぶ声をあげて以来3年目に入っています。現在では約100人の院生の皆さんが研究活動に取り組むまでになりました。前期課程の修了生も出すことが出来ました。後期課程の修了生が出ることが予定されている現在、新しい学会の設立を呼びかける時期が来たと判断いたします。それは次のような理由によります。

1　院生の皆さんが、関西大学大学院外国語教育学研究科を修了したからといって、研究活動が終わりになるということはありません。修了生の皆さんが引き続き積極的な研究活動を続行し、私たちの研究科の修了生として活躍するためには、基本母体の組織が必要と考えます。そのためには新学会を設立し、受け皿を準備することが要求されます。

2　教員側としても、修了生とコンタクトを保ちつつ、協力して更なる研究の発展を維持する必要があります。お互いの人的パワーをあわせて、広い研究のネットワークを構築することは、私たちの研究科の発展のための必須事項と考えます。

3　現役の院生と修了生が、先輩、後輩として一堂に会し、研究と親睦を図る組織母体が必要となります。これから続く研究科の将来を見通して、増加していく修了生同士の研究協力、親睦、融和、発展のための組織を必要とします。

以上の趣旨により、新学会の設立をよびかけます。

2004年6月16日

第 8 号

目次

「新学会設立趣意書、そして研究家の発展と本学会のこれから」　1
「第 7 回研究大会報告」　2
「研究発表1」「研究発表2」「調査報告」　3
基調講演　新時代の外国語教育「国際バカロレアの外国語教育：インターナショナルスクールの例より」　4
研究会報告
講演 「論文作成のヒント」　5
ワークショップ～研究って何？～「研究で困らないための超入門ワークショップ」
学会からのお知らせ
編集後記　6

これは、本学会が設立された時の設立趣意書です。昨年は外国語教育学研究科創立10周年記念シンポジウムが開催され、本学会も設立されてから9年が経ちました。この間に、7回の研究大会、ならびに研究会を開催することができましたことは、先生方をはじめとする会員の皆様のご協力のお陰です。改めまして、感謝申し上げます。本学会の目的は、上記の設立趣旨を踏まえて、学術の向上、発展、会員相互の親睦を図ることです。6月22日に行われた研究会では、修了生でもあられる池田真生子准教授の「論文作成のヒント」というタイトルでのご講演、博士課程在籍で日本学術振興会特別研究員としてもご活躍の植木美千子さんには「研究で困らないための超入門ワークショップ」と題してお話して頂きました。在学中の院生のためにお忙しい中ご準備を進めて下さり、後輩を思いやることばが講演中やワークショップの随所に見られ、きっと参加された会員の皆様は、他学会では感じることのできない心温まる雰囲気を感じていただけたのではないでしょうか。ここに本学会の特徴ともいえるアットホームな学会、つまり他学会にはない一面をみることができます。

さて、この本学会も今後の研究科の発展のために、少しずつ役員の世代交代をすべき時期に差し掛かっています。そこで、ぜひ皆様にご協力頂きたいのが、新役員へのご協力です。次年度より、役員に新たなメンバーを加えて、本研究科の発展のために、本学会を牽引していただけたらと考えております。皆様、それぞれにご活躍中でお忙しいかとは存じますが、役員へのご協力をお願いできませんでしょうか。どうぞ宜しくお願い申し上げます。このニュースレターをご一読頂き、役員としてご協力を頂ける方がいらっしゃいましたら、田尻（bcbgparie@ybb.ne.jp）までお知らせ下さい。今年度も外教学会での研究大会で皆様にお会いできますことを楽しみしています。

第7回研究大会報告 研究委員長 神道美映子

去る2月16日（土）、岩崎記念館において関西大学外国語教育学会第7回大会が開催されました。今回は「新時代の外国語教育」を大会テーマとし、学校種を問わず現場で活躍されている教員の方々を始め、大学生や院生を含む約50名の参加者を得て、成功裏に幕を閉じました。

基調講演では、関西大学教授のカイト由利子先生とカナディアン・アカデミー中・高等部外国語学科主任の佐藤奈津先生をお迎えし、「国際バカロレアの外国語教育：インターナショナルスクールの例より」というテーマでお話いただきました。まず、カイト先生より「国際バカロレア（IB）」の概念や国際的な取り組み状況について、また「インターナショナルスクール」の概要をご紹介いただき、次に、佐藤先生より豊富な資料をご提示いただきながら、インターナショナルスクールでの外国語教育の実践をご報告いただきました。クリティカル思考学習や探求型学習についての実践報告は、刺激的で興味深いものだったと思います。日本では、今、外国語教育のあり方が根本から問い直されており、まさに「外国語教育の過渡期」にあると言えます。そのような中で、IB プログラムが謳う「全人格教育」の内容と、文科省による「新学習指導要領」や「グローバル人材育成構想」の理念とを比較し、深く考える機会が得られたことは、今後の日本の外国語教育を見つめ直す上でも、大変有意義でした。お忙しい中、貴重な資料をご用意いただき、ご講演くださいましたカイト先生と佐藤先生に心よりお礼申し上げます。

研究発表の部門におきましては、今回、初めての試みとして「ニュースター枠」*を設け、帝塚山学院大学の田中絵理佳さんに「日韓の中学英語教科書の比較」について発表していただきました。田中さんの研究は、これまであまり例のない、リスニング活動に焦点を絞ったものであり、韓国の中学校で使用されている英語教材の利点が明らかにされました。韓国同様、小学校から英語教育の導入を始めた日本の教育界において、この調査結果は興味深いものであると考えます。

また、中国語教育に関しては、関西大学大学院の馮時さんより「日本の中国語教学における成語教学について」というテーマで発表していただきました。これは、中国独特の言語文化のひとつである成語というものが、日本の中国語教育でどのように扱われているのかを、日中の教材比較を通して調査研究したものであり、日本での成語教育がまだまだ不十分であることが指摘されました。

さらに、調査報告の部門では、関西大学大学院の小久保有美さんより「日本のインターナショナルスクールで教育をうけた日本人生徒4名の感情表現における意識調査」というタイトルでの発表がありました。日本語を母語としながら、低年齢から英語のみでの教育を受けた生徒たちの内面に迫った本調査では、優勢言語と感情表現との結びつきや、彼らが抱える言語使用に対する不安感などが浮き彫りにされました。グローバル人材の育成が叫ばれる昨今、日本で生活しながらも英語での教育を受ける子供は、今後増えていく可能性が高いでしょう。小久保さんの発表は、子供たちがそのような教育プログラムを受ける場合、留意すべき点は何なのか、バイリンガルとして生きる子供たちのアイデンティティはどのように形成されるのかなど、あらゆる角度からの研究の必要性が感じられるものでした。

大会終了後の茶話会では、ご発表いただいた方々とともに和やかな雰囲気で交流の場を持つことができました。このような場を情報共有のきっかけとし、今後の研究活動に役立てていただけることを願っております。

この度、本大会の準備にあたりご尽力くださいました会長の西川和男教授、田尻利恵子幹事長、そして学会役員の皆様に、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

最後に、今回の大会参加者の中にインターナショナルスクールに在籍する現役高校生の姿があったことをご紹介しておきます。教師を志しているという彼女は、引率してくださった先生とともに参加し、「本当に来てよかった」という感想を残してくれました。自分自身を客観的に見つめ、しっかりと目標を定めて前進する彼女の姿は、まさに IB プログラムの成果なのかも知れませんね。

＊「ニュースター枠」とは学部生を対象とし、本学会での発表申し込みがあった場合に、大会実行委員会により、今後、さらに研究を深めていく可能性があると認められた場合に、その卒業論文に基づいて発表をしていただくものです。

田中絵理佳さん

馮時さん

小久保有美さん

研究発表1 「日韓の中学校英語教科書の比較」 田中絵理佳 （帝塚山学院大学4回生）

今年度よりこれから研究の道に進もうという学部生が発表できる場（通称：ニュースター枠）を設け、この3月に帝塚山学院大学を卒業された田中さんが第1号として、卒業研究で行った日韓の英語教科書比較について発表された。発表では、日本人と韓国人の英語コミュニケーション能力の差に興味を持った動機、特に両国高校生のリスニング能力の差が目立つことが判明した先行研究、その結果、中学校の英語教育に注目し、両国教科書のリスニング活動を分類、分析した結果を丁寧に説明された。注目すべき結果は、韓国の中学校教科書に含まれるリスニング活動は、"Listening as Acquisition" と"Listening as Comprehension"がバランスよく含まれている一方、日本の教科書は、"Listening as Acquisition" の割合が多く、リスニング活動においても意味理解よりも言語にフォーカスが置かれていることが明らかになったことだ。田中さんは現在、大学院進学を目指して更なる勉強と準備をすすめていらっしゃる。これからも彼女のような研究者の卵を応援できる学会であり続けたい。（近藤睦美）

研究発表2 「日本の中国語教学における成語教学について」 馮時（関西大学大学院）

中国語教育に関する研究発表では、馮時さんより、日本の中国語教育での成語の扱いについて、日中の中国語教材の比較調査による結果の報告があり、また、その結果をふまえての教学の問題点が指摘された。

研究手法としては、まず、日本の大学で使用されている「読む・話す」に重点を置いた、一般的な形式の中国語教科書35冊を「初級」「準中級」「中級」「準上級」「上級」にレベル分けし、各々の教科書の成語の収録状況を調査分析した。次に、中国の対外中国語教育用教材38冊における成語の収録状況についても同様に調査分析し、それらを比較検討している。

その結果、中国の対外中国語教育用教材での成語の扱いに比べて、日本の中国語教科書においては、成語が扱われる頻度がかなり低く、提示のしかたにも改善の余地があることが指摘された。日本の中国語教科書では成語が扱われるのは、ほぼ中級以上に限られている上、成語の収録があっても解説が不十分であったり、実際に成語を使った作文練習までは配慮されていなかったりしているということである。一方で、日本で出版されている成語学習に特化した教材や書籍についても触れられているが、これらも、意味解説に偏ったものであったり、作文練習問題はあっても文法解説がなかったりと、成語習得のための教材とするには、まだまだ足りない部分があるという指摘があった。

成語は中国での日常のあらゆる場面、さまざまなメディアにおいて使用頻度が非常に高いものであり、中国語学習者にとってその習得が欠かせないことは、中国語教育に携わる者であれば誰もが認識していることであろう。今後の中国語教育に成語教育をどのように取り入れるべきか、今一度、教材を見直し、検討していかなければならないと感じた。（神道美映子）

調査報告「日本のインターナショナルスクールで教育を受けた日本人生徒4名の感情表現における意識調査」 小久保有美（関西大学大学院）

小久保さんご自身のお子さんがインターナショナルスクールに通われており、言語習得が進むにつれて感情表現が難しくなり、お子との意思疎通が難しくなってきたことが本調査の動機となっている。本調査は、小学校1年生から日本のインターナショナルスクールに通学している日本人男子高校生4名を対象に行われた。女子生徒の協力者がいなかったことが残念ではあるが、4名の高校生に対して質問紙による調査と面接、さらに彼らの母親との面接調査を実施しており、大変丁寧な調査結果と考察が報告された。

インターナショナルスクールに通っていると、日常生活で使用する言語は英語なのかと思ってしまうが、必ずしも学校で使用している英語が優勢言語にならないということがわかった。優勢言語が日本語か英語かによって、それぞれの感情表現の仕方が異なることが大変興味深かった。両親の優勢言語が日本語で子供の優勢言語が英語だと、日本のしつけや規範などを子供が理解できないという問題が生じてくるため、親子間のコミュニケーションが難しいということがわかった。また、両親と子供の優勢言語が日本語の場合は、親子間のトラブルはないが、英語を話す先生に感情をうまく英語で表現することができずに自分自身をコントロールしてしまう傾向にあることもわかった。

同じインターナショナルスクールに通学していても、優勢言語によって感情表現の仕方が異なることは大変興味深い結果だと思った。今回は調査報告として発表されたが、機会があれば次回は論文発表をしていただきたいと思った。（船越貴美）

基調講演　新時代の外国語教育「国際バカロレアの外国語教育：インターナショナルスクールの例より」

カイト　由利子（関西大学・外国語教育学研究科）
佐藤　奈津（カナディアン・アカデミー　中・高等部　外国語科主任）

国際バカロレアとは、スイスのジュネーブに本部を置いている国際バカロレア機構が実施している試験及び資格のことで、この資格は国際的に認められている大学入学資格の一つである。日本のインターナショナルスクールは文部科学省が認可していないために、日本の高校卒業資格が与えられていない。しかし、国際バカロレア資格があれば日本だけでなく海外の大学を受験する受験資格を得られる。文部科学省が5年以内に200校増やす計画を示してから、にわかに注目されるようになった。

講演は前半、カイト先生が日本のインターナショナルスクールと国際バカロレアの概要について説明し、その後佐藤先生が国際バカロレアのカリキュラムに基づいた教育を、どのように日本のインターナショナルスクールで実践されているかを具体的に話された。国際バカロレアの概要を理解してから教育現場での実践を聞くことができたので、非常にわかりやすかった。

カイト先生からはまず始めに「なぜ国際バカロレアなのか」という問いをフロアに投げかけられた。文部科学省は5年以内に国際バカロレア資格を取得可能な、またはそれに準じた教育を行う学校を200校程度へ増加させるという発表をした。これは、「グローバル人材育成推進会議」の中間まとめと「日本再生のための戦略に向けて」という閣議決定で示された方針である。このことにより、国際バカロレアは大会テーマにふさわしい内容であることを示された。実際、国際バカロレアの教育理念人材育成の目標と改定された新学習指導要領の基本的な考え方は類似点が多く、新時代の人材育成プログラムとして注目を集めていることを指摘された。また、日本のインターナショナルスクールの概要と国際バカロレアの概要を説明し、国際バカロレアの目指す全人教育がどのようなものなのかを説明してくださった。

佐藤先生からは具体的な指導法や教員による評価の方法について例を挙げて説明があった。国際バカロレア試験は暗記ではなく論文記述によるものなので、学習評価にも多くの論文作成が課せられていることがわかった。日本の暗記中心の教育とはかなり異なるので、教員の研修が大きな課題となっている。国際バカロレアの認定校になるためには、学校のカリキュラムの改定と教員の研修が求められる。全人教育を通じて、国際社会に貢献できる人材育成をするという大きな目標は、日本の将来を担う子供たちに与えるべきすばらしい教育であると思うが、一方で教える側の信念と熱意がなければ成り立たないことが浮き彫りになった。

最後に今後5年以内に200校の認定という目標を文部科学省は掲げているが、果たしてこの数字は現実的なものなのか、フロア全体に問いかけられた。新学習指導要領により、ゆとり教育は終わりを迎えたが、国際バカロレアの教育理念人材育成の目標と新学習指導要領との類似点と相違点を比較し、学校教育法第1条に規定されている学校でも国際バカロレアに認定する学校を増やすことは可能であろう。現状では、国立大学の附属学校が国際バカロレアの認定を文部科学省より後押しされているという。公立や私立学校でも普通に国際バカロレアの認定を受けられるように、教員の研修制度や補助金制度の充実が切に求められる。
（船越貴美）

研究会報告 研究大会委員長 神道美映子

去る6月22日、岩崎記念館において「関西大学外国語教育学会研究会2013」を盛会のうちに終えましたことをご報告いたします。今回は、院生を中心に多数の参加者を迎え、大変活気のある研究会となりました。

「論文作成のヒント」と題した池田真生子先生のご講演では、論文のプロットの立て方から執筆のマナーに至るまで、論文作成のためのノウハウを実に具体的かつ丁寧にご教示いただきました。実際に池田先生がご使用になられたデータ収集のための「承諾書」の文書例や、論文アウトラインの覚え書き等をご提示くださるなど、まるで手の内を見せていただくような親身なご講演は、これから修論・博論を執筆される参加者の皆様にとって大変貴重なお話であったと思います。私自身も、初心に返って勉強させていただくことができました。

また、「研究で困らないための超入門ワークショップ」では、日本学術振興協会研究員の植木美千子氏が、身近な題材を例に挙げつつ、ユーモアたっぷりに「研究とは何か」をご教示くださり、笑い声の絶えないワークショップとなりました。教員、修了生、院生が共に、和やかにワークショップに参加している光景は、本学会ならではのものだと感じました。「研究者としての観点」を養う例として、「昨年の紅白歌合戦で白組が勝ったのは何故か」をテーマに、さまざまなデータをもとに、あらゆる角度から勝因を論理的に分析していく手法は大変印象に残りました。池田先生と植木氏には、お忙しい中、本研究会のために豊富な資料をご用意いただき、また、学術研究についてのノウハウを詳しくご教示いただきまして、本当にありがとうございました。今回の研究会に参加された方々はきっと、「さあ！明日から研究活動を頑張ろう！」という気持ちになられたことと思います。

最後になりましたが、いつも学会活動を支えてくださっている西川先生、お忙しい中、お運びくださいました竹内先生、本日の総会のために監査の作業をしてくださいました沈先生、山崎先生、そして、研究会運営にご協力くださいました田尻幹事長をはじめとする役員の皆様に心よりお礼申し上げます。どうもありがとうございました。

今後とも、外国語教育学研究科の特色を生かし、皆様に積極的にご参加いただける研究会を、どんどん企画して参りたいと存じます。

講演 「論文作成のヒント」
講師 池田真生子（関西大学准教授）

論文作成のための手順を8ステップに分けご教授して頂きました。実際に先生がお作りになったデータ収集のリストや、論文のアウトラインを書かれた具体的な例をご提示してくださり、論文のテーマを決めるところから執筆、校正、完成に至るまでを詳しくご講演くださいました。

1） 先行研究をまとめる

「巨人の肩の上に立つ」というシャルル・ベルナールの言葉を用い、今までの研究者が行ってきた研究を見ていくことで、この先に必要な研究が見え、それがオリジナリティーにつながる。

先行研究をまとめるにあたり、文献マップをテーマやキーワードで分け、表にしていく方法と、論文の目次を書きだしたものに先行研究を加え、最後の References の部分を作っていくという2つの方法を提示してくださいました。

2） 研究テーマの設定・計画

データ収集・分析まで具体的に考えることで、使えないデータを取ることの防止や分析完了までの時間を把握できる。分析方法は好き嫌いでなく、何を調べたいかをはっきりさせる事で自ずと決まってくる。

3） データ収集

研究計画しっかり立てた後で取り始めること。倫理的問題として事前に許可を取ることへも注意を向けておく。

4） データ分析・考察

分析はいろいろな方法で行ってみる。また、先行研究に戻すことを忘れない。

5） 執筆する

初めから書かないで、まずは全体の構成図を作成する。また、モデル（先輩の論文や先行研究）をまねることから始めてもよい。

6） 校正する

ここで大切なことは、客観的に読み返すために、書いたものを3日～1週間は寝かせる。

7） 文章チェックをしてもらう

ゼミ仲間とお互いにチェックする。特に L2 で執筆しているときは、必ずその分野のネィティブスピーカーや業者にチェックを依頼する。

8） 再校正する

文章チェックの結果に基づいて再校正するが、その際、戻ってきたものについて何でも鵜呑みにせず、解釈のミスリーディングがないか、そこから波及する他の場所への修正などをチェック。

以上の全体を見て、最終期限から遡りバックワードで計画をもって論文作成をしていくようにしましょうと、ご教授頂きました。（竹田里香）

ワークショップ～研究って何？～「研究で困らないための超入門ワークショップ」
講師　植木美千子（関西大学大学院）

「そもそも研究とは何だろう」という疑問をフロアに投げかけ、登山家ジョージ・マロニーの名言、「そこに山があるから」を用いて、「対象認知」、「動機」、「事象」、「興味・関心」などの言葉をわかりやすく説明することからワークショップが始まった。山登りや料理は研究と何の関連性もないと思っていたが、植木氏は山登りと料理を研究に置き換えて、メタ認知の重要性、指導教官との事前相談の大切さ、研究の準備不足等を当てはめて説明を加えた。登山で登頂すると達成感を味わうことができ、成功体験を誰かに話したくなる。それを研究に置き換えると一つの研究の成功が学会や研究会での発表につながっていくことを伝えた。誰もが一度は「研究なんてしたくない」と思うものであるが、「研究の楽しさ」を思い出して原点に立ち返りつまずきから脱する方法も伝授してくれた。

ワークショップの途中で参加者にグループ討論をさせる場面が数回あった。どの例も植木氏自身が子どものときから研究に対する情熱が深かったということがわかるものだった。電車の車掌がどこから運転席に入るのか、ベルリンブルーの話、気配りをどうやって測るのか、紅白歌合戦の視聴率と勝敗の関係等、どんなことでも研究に結びつけることができるのが植木氏の探究心の深さだと感心した。

最後にフロアから「楽しかった」という感想が第一声で聞かれ、「紅白歌合戦の調査にどのくらいの時間を費やしたのか」という質問があった。最初のころは1日近くかかったが、最近は半日で終わるとの回答であった。参加者全員が楽しく、そして役に立つワークショップを体験した。

（船越貴美）

学会からのお知らせ

本学会役員の活動内容を皆様にもお知りいただき、今後の本学会発展のために、本学会役員へのご協力を頂ければと考えております。本学会の各役員の仕事内容について、ご紹介致します。

総務委員会	新規入会登録の案内や会員名簿の更新を行っています。学会入会登録手続きや、会員からの連絡を受け登録内容の変更を行い、随時名簿を更新し、管理しています。
財務委員会	学会活動に伴う財務に関する業務を担っています。会費振込用紙の発行や会費振込確認、年次大会の会計を行っています。
研究大会委員会	年次大会や研究会の企画から開催までを担当しています。年次大会では発表者募集、選考を行ったり、研究会では講演やワークショップの内容検討と講師依頼を行い、各委員会との連携しながら、学会活動を運営しています。
広報通信委員会	学会 HP や ML を通じて、年次大会、研究会等の広報活動を行っています。また、ニュースレターを年一回発行し、会員に向けて活動内容を発信しています。
紀要委員会	年次大会の発表要項集を作成しています。また、『外教学会紀要（仮称）』の発行に向けて、現在検討を重ねています。
幹事長	会長の先生との諸連絡、総会の諸準備や学会の運営が円滑に行われるように各委員会の活動のサポートを行っています。

今後とも、外教学会をどうぞ宜しくお願い申し上げます。

＊　財務からの連絡です。同封いたしました振込用紙にて、お忙しいところ恐縮ですが、会費納入をどうぞ宜しくお願い申し上げます。

編集後記：

思うところあり、この春から仕事をセーブして、科目等履修生として学部の講義を受けています。久しぶりの学生生活は、刺激があって良いものです。自分の子どもと言ってもよい年代の若者との接触は新鮮ですが、ただ暗記力の低下には悩まされています。試験の前は『ドラえもん』の「暗記パン」のことばかり考えていました。（R.H.）